

ブースにおいてはヤコブソンと異なり読者の反応が先にあるという点で、分析結果と詩の印象にギャップが生ずるといふ危険は少なくなるが、テキストをその与えられた読者の反応を引き起こすだけのものに限ってしまう恐れがある。つまりテキストが具体化される過程の一つの例を記述したにすぎなくなる。ブース自身、自分の使う読者は偏見をできる限りなくしたものだが究極的には自分であると述べている。⁽²¹⁾

つまり問題なのは読者の反応はどこまでテキストに還元できるかということである。言い換えればテキストはどこまで読者を拘束するかということである。それを解くにはテキストを読むという行為に意識が向かわざるをえないだろう。

3 構造主義詩学の特質と限界

中 川 葉 子

「詩の文法的分析によって得られるものは、所詮詩の文法の域を出ない。」⁽²²⁾
——1962年にヤコブソンがレヴィ＝ストロースと共に行なった、ボードレールのソネット“Les Chats”の分析に対して、ミカエル・リファテール(Michael Riffaterre)はこう言って批判した。そして更にリファテールは自らの文体論に基づいて、このソネットをあらためて分析している。フォルマリスティックな文法分析による詩の解釈に対して、読者の反応という概念を導入して反駁したリファテールのこの評論に、構造主義とそれを補う reader-response criticism の対照を見ることは可能であり、またそうされてきたのも事実である。しかし、リファテールの批評の軌跡の中でかなり早い時期に属するこの評論は、図らずも、彼がこの時期にはぬぐおうとしてぬぐいきれなかった構造主義の残像を露わにするものでもある。

ここでは、ヤコブソンとリファテールの、一見対立した立場に共通した批評態度を見出し、それを構造主義詩学の特質の一端として提示したいと思う。

まず、もう一度ヤコブソンの詩学とその分析方法を簡単にまとめてみよう。ヤコブソンは、言語記号の配列における選択と結合という2つの面を前提として、選択の軸から結合の軸への投影を言語の詩的機能と呼んだ。そしてその詩的機能によって成立する平行性をさまざまなレベルにわたってテキストから選び出し、二項対立の原理によってそれらを結び合わせていく——これが彼の分析の主たる方法である。この平行性を選び出す際にはテキストの各要素を一旦ばらばらにしなければならない。そして再度それらを構成しなおすわけである。この場合、ヤコブソンの前には、まぎれもなく空間的で静的 (static) な自足した有機体としてのテキストがあるだけである。そこには、作者も、読者も、その読みの行為も、そして時間も、介在する余地はない。

こうしたヤコブソン流の分析を文法の分析として批判したリファテールは、彼の文体論において、言語構造と詩的構造とを区別するために、読者及びその読みの概念を導入している。リファテールによれば、詩的構造の構成要素となるのは文体技法であり、それは文体的文脈 (stylistic context) からのずれ——具体的には読者の予測不可能性から察知される——によって表わされる。この文体分析における読者に、彼は「原＝読者」(superreader) を設定し、その読みの過程における反応を分析のよりどころとするのである。

そこで、リファテールがテキスト、読み、読者等を、いったいどのようにとらえているかが問題となってくる。

(1) テキストと読み

リファテールから一節を引用してみよう。

テキストはその不動の相、静的な相をなすものであり、一方、テキストの「方向づけられた」読みは、その変動する（はっきりと確定された限界と規則の範囲内で）相、動的な相をなすものである。⁽²³⁾

読みのダイナミズムを云々する前に気づくのは、リファテールがテキストと読みとを全く二元的にとらえていることである。彼にとって、テキストは読みの行為と不可分な意味形成の場ではない。読者の読書体験 (reading experience) がテキストの意味を創り出すのではなく、意味は作品に、いや言語にはりついており、先験的に存在している。従って、読みの行為は創造的な生産行為では

なく、受動的な知覚行為にすぎない。この点に、リファテールのこの時点でのテキスト理論と、構造主義以後 (Post-Structuralism) のそれとの決定的な相違を見ることができる。

(2) 読者

リファテールにとって、読者の反応の内容は、意味生成に関与し得ないため不要であり、ただ「文脈からのずれ」があるか否か、即ち反応の有無だけが問題となる。⁽²⁴⁾ ここで読者は主観をとり除かれる。

さて、“Les Chats”の分析に際して設定された原＝読者は、“Les Chats”に付けられた註、作品に対する批評、リファテールの学生等を含む、非常にあいまいな形で合成された読者である。そして分析に必要なのはそれぞれの構成要素の反応の最大公約数である。本来、読者がテキストを解読する場合、読者自身もつコードを用いる。それは彼の有する経験により、また彼の属する文化により異なるもので、最終的には彼の主体に帰属する。しかし、リファテールの原＝読者の解読は主体をはぎとられた最大公約数の解読である。個のコードの背後にあるコード、パロールとラングに対応させるならば、ラング的コードを用いることになる。かくして原＝読者には、この常数としてのコードしか残されていないのである。従ってリファテールの読者は、リファテール自身であり、彼の学生であり、他の誰でもあり、そして結局誰でもない。

(3) 時間

作品は自らの内と外に時間を持つ。作品内の時間は読書体験によって具現され、作品外の時間は作品が背景にもつ歴史によって具体化される。

リファテールは読みの概念を導入することによって前者に対しては関心を示したが、後者の介入——テキストの意味に対する——を許すことはできなかった。彼が、ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth) の詩 “Yew-Trees” の分析⁽²⁵⁾において、固有名詞のもつ歴史的アリュージョン (allusion) を排斥したことはその一つの例となる。⁽²⁶⁾

こうして作者という主体——リファテールは最初から排除している⁽²⁷⁾——、読者という主体に意味形成の場での介入を許さない点、いいかえれば、言語に意味がはりついていて、テキストに生産性が与えられない点、そして、少なく

とも作品外の時間は許容しようとしなない点、これらの点が、この時期でのリファテールとヤコブソンの共通点であり、リファテールに見られる、構造主義詩学の影である。

ただ、ヤコブソンは詩の文法構造を、リファテールは語の先験的な意味を過信して、裏切られたのである。

さて、ここで終わるのはリファテールに対して公正を欠く。彼はヤコブソンよりも前を進んでいる。確かに彼はこの時点で、未熟ではあるが読者と読みの概念を導入しており、読みの方向を規定し、遡及的效果を認めて作品内の時間を介在させ、テキストの開かれた構造に対して一步を進めている。そして更に主体の問題と作品内外の時間をテキストという意味形成の場に持ちこむ方向へと批評の流れは傾いてきているはずであり、彼は今や尖鋭なる記号論者の一人である。

この意味で、リファテールは Formalism から Post-Structuralism に移行していく批評の流れとともにその軌跡を描きつつある批評家といえよう。

ただ、ここで扱った評論では、その移行における過渡期の理論の中途半端さをその実践との齟齬が暴露している。“Les Chats” 分析におけるリファテールの解釈は彼の方法論にというより、彼という一人の読者の知識と力量とに負っている。なぜならば、彼は原＝読者の主体をはぎとることはできても、批評家としての彼自身の主体を捨てることはできないからである。

詩の文体分析によって得られるものは、所詮文体の域を出ない、というのまた、彼にとって一つの真実なのではないだろうか。

4 詩の分析、詩の生命

中 川 一 雄

But Euclidean order could not satisfy Leonardo for long,
for it conflicted with his sense of life;
K. Clark, *Leonardo da Vinci*